生産資本循環論の方法論的再検討

平　田　清　明

I はしがき

『資本論』第2巻第1篇資本循環論は,『資本論』の原理的研究のなかで従来もっとも取り上げられることの少なかった篇である。とくに第2巻第3篇再生産表式論との関連において本格的に取り上げられたことは，ほとんどないと言ってよい。これに反して，第2巻第2篇資本回転論は，戦前から恐慌の周期性に関連するかぎりで，断片的にではあるが，かなり多く取り上げられてきたし，最近ではマルクス主義的景気循環論としての恐慌論を展開する必要に迫られて，系統的な研究もすすみはじめている[1]。しかし，この場合でも，表式論と回転論との検討が，循環論にまで遡ったところの，第2巻全体の方法論的反省にまで，たちいたっていないようである。そのために表式論は，依然として,『資本論』第2巻のうちでの——いや時には,『資本論』全篇のうちでの——独立王国であるかのように取りあつかわれ，表式そのものの理解も重大な誤謬につつまれていることが多い。その例を今ここでいちいちあげる余裕を私はあたえられていないが，表式論でしめされているいわゆる「再生産の法則」がほかならぬ循環の総過程のなかで貫徹するものであることについて，方法論的自覚がいかに不足しているか，という点だけはひとこと指摘しておきたい(本稿第Ⅲ節参照)。原理論研究における表式論の方法論的無反省は，従来の恐慌論研究において景気循環のディナミスムを理論化するうえで最大の障碍になったものであり，また，これこそ，今日の現状分析の領域において，日本資本主義の構造的変化を規定する個別的産業資本の技術革新＝資本蓄積過程の動態にたいして理論的アパシーを培養してきたものでもあった。

われわれは今日，表式論が循環論とどのように関連しているのか，と問う必要に迫られている。そして，次のように問題をたててみなければならない。——『資本論』第1巻の最終篇をなす資本蓄積論は，この書物を貫く階級史観の赤い糸を直接的生産過程の論理段階でひとまず総括したものであるが，この篇に直接つらなるところの第2巻冒頭篇が，なぜに，資本循環論でなければならないのか。さらに，この篇がどのような意味で回転論を不可避的な自已展開として伴うことによって，再生産表式論のなかに自已を止揚しなければならないのか。

このような設問は，原理論の研究のうえで必要であるばかりでなく，学史のうえでも避けることができない。学史研究は，つねに文献上の考証と発見のなかで，不断にその理論的分析基準の再検討をもとめられるものであるが，今日とくに古典経済学の研究を前進させるうえでは，この点の再検討がせまられているように思われる。資本の循環過程の諸形態は，そのうえに立脚して資本の運動を考察する経済理論の基礎的な分析規角と社会的ヴィジョンを，規定するものであって，マルクスがケネー『経済表』をもって再生産表式の原型とみなし，これを商品資本循環(W′……W′)の理論的範式によって特徴づけたこと，また,「重商主義」と「古典経済学」とを，それぞれ貨幣資本循環(G……G′)および生産資本循環(P……P)の範式をもって特徴づけたことは，今日，広く知られている。しかし，今日の学史研究の現状では，これらの特徴づけはその理論的意義を十分に掘りおこされていないし，そればかりかフランス古典経済学については，それらが学史研究の有効な導きの糸であるよりも，理論的＝内在的分析の放棄を

1) このような労作として，高木幸二郎『恐慌論体系序説』および林直道『景気循環の研究』をあげることができる。

ひきおこしているように見うけられる。その実例をあげる余裕も，これまた，ここでは与えられていないので，ただ，その原因がマルクスの表式論および循環論の方法論的無理解にもとづくことを，指摘するにとどめる。[2)]

本稿は，以上のような問題意識にたって，学史研究の理論的分析基準を再検討するために(同時に表式の方法論的反省をふかめるためにも)『資本論』第2巻第1篇循環論を，あらためて検討しようとするものである。

II　生産資本の循環過程と資本の蓄積過程との連関

生産資本の循環過程は，資本の循環過程の3形態のうちで独自的な意義を秘めている。それは，過程そのものの自己目的としては「生産としての生産」を示し，また，過程そのものの進行のなかで資本制商品流通を一般的商品流通としての商品流通に，そして後者をさらに，たんなる質料変換に解消することによって，みずからその「自然主義」的性格をあらわにし，そのうえに立脚して資本の運動を考察する経済理論家を「俗流経済学」の立場に走らせるものでありながら，[3)] しかもなお，次の2つの点で資本の蓄積過程を補完するものとして，特殊歴史的な資本主義的特性をみずから示している。

イ　生産資本の循環は，その過程の形態P……Pそのものが示しているように，不断に完結することのない再生産の過程であり，絶えざる反復こそがこの資本循環過程の特性なのであるが，この不断の反復を通じて生産資本の循環過程は，人目につかぬ1つの秘儀を成就する。それは何か，といえば次のことである。

生産資本の循環過程は，その過程の反復の一定の経過後に，その期間中に資本家が対価なしに取得した剰余価値の総額を，この過程のそもそもの初めにおいてその資本家がなんらかの権限にもとづいて所有していた資本の価値と等しい額に到達させる。しかもなお，その本源的資本の価値をすこしも消滅させることなく，それを保存する。生産資本の循環過程は，この平凡な事象を実現することによって，たとえその一定期間中の剰余価値がすこしも資本化されずにすべて資本家によって個人的に消費されるといったような場合でも，資本を，とくに自己労働の所産としての資本を，他人の不払労働の所産に転化させ，資本とはその歴史的起源がいかなるものであれすべて資本化された剰余価値にほかならないことを，みずから示すのである。

というのは，自己労働の所産としての価値が，いまもし資本として機能することなく，したがって剰余価値をうみださないならば，それは1定期間ののちには個人的消費の必要によって，消滅してしまうはずであって，この自己労働の所産としての価値が資本として機能し剰余価値をうみだすからこそ，この資本価値はそれの産出する剰余価値をもって，この資本家の個人的消費欲望を満足させ，みずからの価値部分を保存するのである。そして一定の期間後には，資本家がその期間中に対価なしに取得し消費したところの剰余価値の総額を，この資本家がはじめ自己労働にもとづいて形成した資本価値の総額に，ひとしくするのである。このことは，自己労働の所産としての資本が他人の不払労働の所産に転化したことにほかならない。しかも，循環過程という経済的過程のなかで転化したことにほかならない。

このことは，本源的な資本が自己労働の所産としての財産ではない場合，つまり，かの本源的蓄積過程を特色づける経済外的暴力によって，他人の労働の所産としての他人の財産を収奪することによって形成されたものである場合にも，意味をもっている。なぜならば，この経済外的な要因によって形成された資本が，循環過程という経済過程によって，この経済的過程そのものの帰結として示されるからである。

したがって生産資本の循環過程は，本源的資本が，小商品生産者的勤労の所産であれ，経済外的

---

2)　以上の指摘は，従来のケネー『経済表』に関する諸研究の高い文献史的意義を否定するものではない。『資本論』研究を古典研究に生かす場合の方法論的誤謬に関するものであることを，ここに付記する。

3)　拙稿「再生産過程把握における生産資本循環の意義」埼玉大学学会誌，『社会科学論集』第4号参照。

暴力による掠奪物であれ，そのいずれをも，循環の過程の内部で，この経済的過程の独自的成果としてたえず再生産し，資本が本質的に資本化された剰余価値にほかならないことを示すのである。

ひるがえって考えてみて，『資本論』第1巻最終篇の資本蓄積論は，資本主義的生産過程の前提が，ひとたび歴史的にあたえられると，このおなじ資本主義的生産過程のなかで，この生産過程そのものの帰結として再生産されることを，論証しようとしたものであった。[4] しかし，そこでの論述は，展開すべき重要な部分をのちの論理的次元にゆずったもの，その意味で抽象的・基礎的な説明にとどまっている。なぜならば，本源的に蓄積された資本が資本主義的に生産された剰余価値の集積そのものに自己転化するプロセスを，十全に展開していないからである。このプロセスを総体的に検討＝叙述するためには，「資本制生産過程をその更新のたえざる流れにおいて考察する」ことが絶対に必要である。マルクスは，『資本論』第1巻の最終篇において資本制蓄積を説明するにあたって，「反復される生産過程」を「考察」の視野におさめ，「更新のたえざる流れ」そのものの論述をのちにゆずったうえで，この「反復される生産過程」の「ある特定の年数の経過後には，〔当初において〕資本家によって所有されていた資本価値は，おなじ年数のあいだに対価なしに取得された剰余価値の総額にひとしく，彼によって消費された価値の額は最初の資本価値に等しくなる」，そして，この場合には，小生産者的勤労によって形成された本源的資本も「資本家自身のファンドから前払された価値である意義を喪失し」，経済外的暴力によって形成された本源的資本も，当初の本源的＝経済外的性格を喪失する，と結論したのである。(『資本論』第1巻第7篇第21章)。

生産資本の循環過程は，資本制生産の「更新のたえざる流れ」であり，「反復される生産過程」そのものにほかならない。したがって，『資本論』の論理的展開序列のうえでは，生産資本循環論こそ，資本蓄積論を補完すべきものとして，これに後続するものなのである。このことは，以上に述べたように『資本論』の論理的展開の内実についてばかりでなく，その展開形式についても，確認されうることである。なぜならば，生産資本の循環過程は，

$$P\cdots\cdots W'\begin{cases}W\\+\text{—}G'\\w\end{cases}\begin{cases}G\text{—}W\begin{cases}P_m\\+\cdots P\\\mathrm{A}\end{cases}\\+\\g\text{—}w\end{cases}$$

という「説明的形態」でみずからを表現するのであるが，この形態的自己表現においては，みずからの過程の前提を過程の進行のなかで過程そのものの帰結として示しているからである。P……P フォーミュラは，資本主義的生産過程の前提がひとたび歴史的に与えられると，このおなじ資本主義的生産そのものの帰結として再生産される，という資本蓄積論の核心的命題を，端的に表現したものにほかならない。したがって，P……P の形態的特徴そのものが，ほかならぬ生産資本循環過程こそ資本蓄積過程を補完するものであることを物語っているのである。

なお，以上の説明では，剰余価値がすべて資本家によって個人的に消費されるということを想定しているが，それが資本に追加されると想定した場合には，資本蓄積過程を補完するものとしての生産資本循環は，あらたな意義を獲得する。なぜならば，蓄積剰余価値部分は新投資としてただちに資本に追加されるのではなく，一定の技術的・社会的水準によって規定された「資本の最低限」に到達するまで蓄蔵されなければならないのであり，この最低限への蓄蔵を媒介するものこそ，生産資本循環の反復にほかならないからである。

したがって，資本の蓄積過程はその本源的資本価値部分についても，蓄積剰余価値部分についても，生産資本の反復される循環過程においてのみみずからを完成するのである。

ロ　資本の蓄積過程と生産資本の循環過程との関連は，以上につきない。資本の蓄積過程にふくまれているところの，階級としての労働者の再生産過程をば，生産資本の循環過程は，その過程の形態的特徴によって示すからである。さきに掲げた生産資本循環の総過程を念頭に浮べて，そのう

4)　内田義彦「経済科学の成立，マルクス経済学」弘文堂講座『近代思想史』第5巻参照。

ちの流通の第2段階 $G—W\begin{cases}P_m\\A\end{cases}$ すなわ $G\begin{cases}G_1—\\—W\\G_2—\end{cases}\begin{cases}P_m\\A\end{cases}$ が総過程のなかでもつ意味に注目せよ。

この流通の第2段階は，その第1段階とともに，それ自体としては単純な商品流通であるが，しかもなお「一般的商品流通としての商品流通から独立した他の諸要素をふくんでいる」。$G_2—A$ は，その価値以上の価値を創造する特殊な使用価値を有する商品としての労働力の購入であるという点で，すでに，一般的商品流通としての商品流通に解消されないものであるが，この $G_2—A$ が P…P の総過程のなかにその部分過程として位置づけられるとき，それは，特殊の資本主義的内実をふくむものであることを，みずから示す。この循環範式のなかでは，$G_2—A$ は，たんに資本家がその所有するファンドのうちから一部を支出して労働力商品Aを購売するということではない。なぜならば，G_2 そのものが，最初の極 P において他ならぬ労働者階級自身によって生産された商品価値 W′ の一部分の転形にほかならないからである。$G_2—A$ は，資本家が労働者階級に生産させた価値をもって，この労働者階級の労働力を，新たな剰余価値の生産のために，購売＝支配することであり，労働者階級自身に作らせた鉄鎖をもって，ふたたび，この階級を金しばりにすることにほかならない。このことのために，$G_2—A$ の結果として労働者がおこなう $G_2—W_2$（賃銀による生活資料の購入）すらも，一般的商品流通としての商品流通に解消されえないものを含むようになる。$G_2—W_2$ は，労働者が自分自身の維持のためにおこなう生活資料の購入であるが，この $G_2—W_2$ を成立させる $G_2—A$ が P……P の総過程の一環である以上，$G_2—W_2$ もまた，客観的には，資本制生産に不可欠な要因たる労働力の再生産過程一環にほかならない。

要するに，生産資本の循環過程は，その総過程のなかに位置づけられた $G_2—A$ という赤い糸を通じて，賃労働者が生産手段から自由にされていること，つまり資本関係こそが，この循環過程の真に本源的で真に終結的な形態であることを，みずからの形態的特徴によって示すのであり，この意味でも，資本の蓄積過程を補完するものである。

〔P……P フォーミュラに立脚していた古典経済学が，一方では「自然主義」的な予定調和と一般均衡への傾斜を示して「俗流経済学」への転落の道をみずから用意しておりながら，しかもなお他方では，市民社会の階級的把握をともかく経済理論に定着させることによって，資本主義体制の科学としての経済学の「古典」となりえたのは，P…P が，G……G′ および W′……W′ とはちがって「自然主義」的＝超歴史的な形態規定をまとっているものであると同時に，あくまでも資本の特殊な運動過程として，右に説明したような，特殊歴史的な資本主義的内実をそなえたものだからである。古典経済学の特徴は，この資本主義的内実に着目しておりながら，それを「自然主義」的な範疇構成において理論化したところにある，といってよい。また，シスモンディが，スミスに「忠実に」師事して P……P に立脚しながら，リカードォとはちがって資本主義批判を直接に提起したのも，P……P の上記の二重性にもとづいてのことであり，さらに，その制約のなかでのことであった[5)]〕

III　生産資本循環と商品資本循環との関連

以上に述べたことは，P……P がどのような意味で G……G′ を批判するものであるかを示している。G……G′ は，資本の規定的自己目的たる価値増殖を，この循環過程そのものの自己目的として端的に表示することによって，資本の運動としての循環過程を「最も適切に，最も特徴的に」表現する形態であるが，しかし他面では，資本の蓄積過程と循環過程との関連をみずから示さないという理由で，「最も一面的な」循環形態である。P……P は，右にみたように，この蓄積過程との連関を直接に示すことによって，G……G′ の「一面性」を批判し，またフォーミュラにまつわる「自立性の仮象」を曝露するのである。[6)] したがって，

5)　拙稿「シスモンディ経済学の再検討」名古屋大学経済学会誌『経済科学』VIIの3）参照

6)　拙稿「再生産過程把握における生産資本循環の意義」（前掲）参照。

生産資本循環論こそ資本蓄積論を直接に補完するものとして，『資本論』第2巻第1篇の第1章におかれてしかるべきものであるが，それが第2章に配置されて第1章には貨幣資本循環論が叙述されているのは，あたかも『資本論』第1巻において，絶対的・相対的剰余価値の生産が説明されてこそ「貨幣の資本への転化」が実質的に説明されるはずであるにもかかわらず，資本の形態的特殊性を論理的に展開する必要から，叙述の順序が逆になっているのに似ている。

P……P と G……G′ との関連については，さしあたってこれだけを指摘しておいて，つぎに，P……P と W……W′ との関連について述べよう。

イ　G……G′ は，価値増殖をとげた貨幣 G′ をもってその過程を終結しており，したがって，資本の運動の規定的自己目的である価値増殖を循環過程そのものの自己目的として示しているので，この循環過程は自己完結的であり，そのために，排他的に固定されやすいのであるが，これに反して P……P は W′……W′ とともに，たんなるものでる生産諸要因 P または商品 W′ をもって終結するあり，価値増殖はこの循環過程内部の経過的な部分過程 w-g-w によって示されるものである。そして，この価値増殖が資本の(循環過程をふくむ)すべての運動の推進的動機である以上，P……P と W′……W′ とは，資本の運動の規定的目的をこの両形態の循環過程なりに示している経過的な部分過程 w-g-w を不断に実現するために，その過程全体を不断に続行させていなければならない。それゆえに P……P と W′……W′ とは，本来，「未完結」なのである。したがってまた，その過程のなかに含まれている生産過程を不断に反復させるのである。この意味で，P……P は必然的に，連続的生産としての「再生産を含む」のである。このことは，自己完結的な G……G′ (「説明的形態」で示せば，$G—W\left\langle\begin{matrix}P_m\\+\\A\end{matrix}\right.\cdots p\cdots W'(W+w)—G'(G+g)$

が，生産過程をば「金もうけのための不可避的中間項」すなわち「必要悪」とみなして，その総過程をしばしば G-W-G′ または G-G′ に倭少化するのと対照的である。

これらの点は，P……P と W′……W′ に共通するところであるが，循環過程のこの2つの形態はつぎの点でことなっている。P……P は，その過程が新たに投下された資本価値 P をもって始まるのであるから，それだけで単独に「歴史的舞台にのぼりうる最初の資本」でありうるのであり，この点では G…G′ と共通である。これに反して W′…W′ は，すでに増殖された資本 W′ をもって始まるのであり，しかも，その出発点である W′ たるや，他の資本形態たる「生産の商品的諸構成部分の使用形態および価値が生産過程で通過した現実的転形の結果」であり，さらに，この W′ が貨幣を媒介にして「他人の手にある他人の諸商品」W (P_m+A) および w に転態することによって，はじめて循環過程がその第1段階を経過するのである。したがって W′……W′ は，P……P の運動の結果として始めて成立しうるのであって，それ自体として独自に歴史的舞台のうえに最初にのぼりうるものではないし，また P……P との関連をぬきにして理論的に分析されうるものでもないのである。商品資本循環論が『資本論』第2巻第1篇第2章生産資本循環論のあとで第3章として叙述されるのは当然である。

〔マルクスが『資本論〕第2巻第1篇第3章を結ぶにあたって「W′……W′ はケネーの経済表の基礎をなすものであって，彼が G……G′ (重商主義の固持した唯一の形態) ではなくて，この形態をえらんだ——そして P……P をえらばなかった，ということは偉大にして正確な腕前を示すものである」と述べたのは広く知られている。しかし，このことを，ケネーは P……P と W′……W′ との関連にまったく気づかずに，ただちに W′……W′ にとびついた，そして W′……W′ だけに注意をうばわれていた，と理解するのは，あきらかに論理的な誤謬である。そのようなことは，右に述べたことから知られるように，論理的に成立する余地のないことである。[7] なお，この点については次項ロ参照のこと。〕

つぎに，P……P は，W′……W′ と同様に，前述した剰余価値の流通 w-g-w とこれに併行する資本価値の流通 W-G-W とを内包しており，したが

ってまた「他人の手にある他人の諸商品」(W＋w)の生産的および個人的消費を含蓄しているが，

この一個同一の総流通過程 $W'\left\{\begin{matrix}W\\+\\w\end{matrix}\right.-G'\left\{\begin{matrix}G-W\\+\\g-w\end{matrix}\right.$ が

P……P と W′……W′ とでは，それぞれの循環形態の総過程のなかでもつ意味をことにしている。P……P では，この総流通過程はあくまでも，個別的1資本の連続的な生産過程としての再生産過程を媒介するものでしかない。これに反して，W′……W′ では，それは，循環過程全体の自己目的にほかならない。しかも，W′……W′ は，それがそれ自体としてはあくまでも個別的な1資本の流通でありながら，同時に，しかも直接に，社会的総資本の流通過程でもある——たとえ，そのすべてではないにしても。「W′……W′ は運動が最初から産業資本の……全体的運動として現われるところの唯一の循環である」(『資本論』第2巻第1篇第3章)，いいかえれば「たんなる個別的1資本の孤立的循環以上のものである」。したがって，W′……W′ は，個別的資本の循環という問題次元では検討されつくされない問題を，本来，ふくんでおり，社会的総資本そのものの独自的な内的関連においてのみ，みずからを十全に展開しうるのである。商品資本循環論が再生産表式論のなかに止場されねばならない所以はここにある。

ロ　右のイの論述のなかでひとこと指摘しておいたことであるが，われわれは，W′……W′ の最初の極 W′ が，商品資本循環とは別個の生産資本循環の過程のなかですでに産出された生産物であること，そして，これが転態すべき W および w も，同様に，商品資本循環とは別個の，しかも W′ を放出した生産資本循環とも異る生産資本の過程内ですでに産出された生産物である，というごく平凡な事象に注目しなければならない。なぜならば，そこには，普通みおとされがちなことが含まれているからである。すなわち，個別的な1商品資本の循環過程(1個のW′……W′)は，多くの個別的な生産資本の循環過程(多数のP……P)の進展を前提しているのであり，この多数の生産資本循環の系列のなかにある多数の商品生産物を，相互に流通させるのである。そうすることによって，W′……W′ はそれらの多数の生産資本循環過程の円滑な進行を可能にするのである。したがって，W′……W′ の運動は，個別的資本の運動形態でありながら，個別的資本の運動領域をこえているのであり，社会全体に存在する諸商品生産物の生産的消費および個人的消費の相互的な絡みあいを媒介しているのである。つまり，社会的総資本の再生産過程における価値および素材の相互的補塡を媒介しているのである。ただし，さまざまな生産部門からなる社会的総資本の価値および素材の相互的補塡関係そのものの独自的内容は，個別的資本としての商品資本の循環過程 W′……W′ によっては，もはやすこしも示されないのであって，それは社会的総資本の再生産表式においてのみ，展開されるのである。(表式論への論理的移行の必然性。前述のイと同様。)

以上は，W′……W′ と P……P とがどう関連しているかを，W′……W′ の側から述べたのであるが，この関連を P……P の側から述べれば，次のとおりである。

社会全体の総生産資本の循環過程は，個別的資本としての生産資本に固有な循環過程範式 P…P′ によっては，みずからを十全に表現することができない。それは，みずからを多数の P……P によって表現すると同時に，この多数の P……P の同時的進行を可能にする W′……W′ によって，みずからを表現しなければならない。社会的総生産資本の循環は，みずからの過程の展開のなかで，生産資本に固有な循環形態をみずから乗りこえて，商品資本循環の形態をもって，みずからの叙述を完成させなければならないのである。なぜならば，社会的総生産資本は，多数の個別的生産資本によって構成された1集合体であるが，それを構成する個々の生産資本がそれぞれそれ自身の循環過程を展開するかぎり，そこには，生産資本に固有な P……P が資本の流通過程の時間的経過(縦の関係)を示すものとして無数に形成されるのであるが，それとともに，この無数の循環過程系列のそれぞれの内部に含まれている総流通過程 $W'\left\{\begin{matrix}W\\+\\w\end{matrix}\right.-G'$

$\left\{\begin{array}{l} G-W \\ + \\ g-w \end{array}\right.$ が相互にとり結ぶ(横の関係としての)関連が，生産資本循環P……Pとは別個の商品資本循環W′……W′によって総括されねばならないからである。そして，そのうえで，この相互連関に独自な内的諸関係が1つの集合体としての社会的総資本の「再生産の法則」としてみずからを確立しなければならないのである。要するに，社会的総生産資本の循環過程を経済理論のうえで総体的に叙述するには，P……Pのうえに「排他的」=固走的に立脚してはならないのであり，このP……Pが成立させるところのW′……W′にまでその立脚点が高められなければならないのであり，さらに，社会的資本の価値および素材の法則的な相互補塡の次元にまで到達しなければならないのである。

〔前項イにおいて引用したケネーについてのマルクスの指摘は，社会的資本の再生産過程の理論的解明にむかって論理的分析の歩みが前進しうるためにまず第1に必要なことは，個別資本の循環の論理的次元において「P……P ではなくて」，P……Pが成立させるところのW′……W′の独特な社会的意義を発見することであり，ついで，このW′……W′という「循環形態をえらびとる」ことによって，個別的資本の次元から社会的資本の次元への論理的移行を達成することができるのであり，ケネーこそこの至難の大業を成就した人物であって，「その偉大にして正確な腕前」は賞讃に値する，と語っているのである。そして事実，このマルクスの指摘は，ケネー自身による『経済表の分析』の核心を照射しているのである。また，マルクスの時代に発見されていなかった『経済表』の「原表」は，資本蓄積過程と生産資本循環過程，後者と商品資本循環，さらにこの後者と社会的総資本の再生産過程との，総体的関連をケネーなりに十分には解明しきらず，この関連について理論的模索をこころみたものであって，その理論的意義は絶大であるといわなければならない。[8)]〕[9)]

---

7) 拙稿「再生産過程把握における生産資本循環の意義」前掲，参照。

8) 拙稿「フランス古典経済学」弘文堂講座『近代思想史』V，参照。

9) 戦前戦後を通じて資本循環論に関する多少とも系統的な論述としては，宇野弘蔵「資本の変態とその循環」(『資本論体系』中)があげられるが，この論稿での宇野氏の所説は，『資本論』の第1巻および第2巻を「生産論」と「流通論」として相互に切りはなし，両者の関連については，ただ前者が資本の「内容的研究」であるのに対して，後者がその「形式的研究」であると述べているだけであり，戦前における『資本論』第2巻の体系的位置をめぐる方法論的無理解の1典型をなすと同時に，戦後における氏独特の「原理論」構成の理論的基礎となっている。なお，藤塚知義氏の「いわゆる『再生産表式』の理解についての1問題」(玉城・末永・鈴木共編『マルクス経済学体系』上巻)は，氏自身が断っているように，まだ試論の域をでないが，『資本論』第2巻を構成する3つの篇の関連および表式論と恐慌論体系との関連についての方法的省察を——断版的ながら——含んでいて，今後の展開が期待される。